令和８年度 岩手県立花巻北高等学校第１回学校運営協議会 議事録

1. 開催概要

項　目	内　容
開催日時	令和８年５月 14 日（木） 15:05～16:50
会　場	岩手県立花巻北高等学校 中会議室
出席者（委員）	伊藤達也（株式会社伊藤工作所代表取締役社長）、菊池剛史（PTA 会長）、阪本泰光（岩手医科大学教授）、佐藤良介（桜雲同窓会会長）、三國卓郎（和同産業株式会社代表取締役社長）、田村篤史（岩手県立大学准教授）、冨手京子（花巻市地域婦人団体協議会理事）
出席者（学校側）	和田健利（校長）、三上浩永（副校長）、多田容子（事務長）、小笠原祐子（教務主任）、山根智暁（進路指導主事）
欠席者	青山慶、佐々木晋、佐々木裕

2. 委員委嘱

会議の冒頭、「岩手県立学校における学校運営協議会の設置等に関する規則」に則り、委員の委嘱が行われた。

3. 校長挨拶：学校の近況とビジョン

和田健利校長より、

- **着任の抱負:** 4 月の着任以来、とても新鮮な日々を過ごしている。花高生の充実した高校生活の実現と、花巻北高校のさらなる発展のために力を尽くしていく。
- **生徒数データ:** 新入生 225 名を迎え、全校生徒 657 名で新年度が始動。
- **教育活動の軌跡:** 入学式、対面式・入団式、そして伝統の応援歌練習（4 日間）を通じ、生徒が真剣に自己を磨く様子を共有。また、高総体地区予選での躍動や、北上市のさくらホールで開催される吹奏楽部定期演奏会（5/16）を案内。
- **STEAM 教育と地域・大学連携:** 前日に実施された 1 学年探究活動（岩手医科大学での講演・研究室見学）における、阪本委員をはじめとする高大連携の成果報告と感謝の意を表明。

4. 国際交流事業報告：ASMSA 派遣事業

（引率者代表　佐藤裕子先生）３月に派遣生徒５名、引率２名で、本校同窓会からのご支援を受けて、米国アーカンソー州ホットスプリング市のアーカンソー数理芸術高校（ASMSA）を訪問。生徒たちは ASMSA 生徒との交流の中で、明るく積極的な態度や日々の学習に臨む姿に感銘を受けながら充実した交流を送ることが出来た。

＜生徒５名による発表要旨＞

- **ASMSA の概要と学習環境:** ホットスプリング市は温泉が有名で花巻市と姉妹都市でもある。ASMSA は科学・数学・芸術に特化した先進的な学校で、多くの生徒は学生寮で生活している。セルフサービス形式のカフェテリアにおける「自己決定」の重要性を体感。
- **日米の教育文化比較:** 授業中に即興で歌唱が始まるような開放的な学級文化や、教師の講義中であっても常に挙手が絶えない生徒の能動性に、主体的な学習姿勢の重要性を再認識。
- **異文化体験とグローバルスタンダードへの気付き:** チップ文化への戸惑いや、野球の球速測定におけるマイルとキロの単位換算ミスなどの実体験を報告。これらは、異文化における「グローバル基準（スタンダード）」を感覚的に理解する貴重な学習機会となった。
- **成果と展望:** 「主体的な意見共有がより良い学習環境を創出する」という確信を得て、帰国後の学習姿勢への前向きな変化を報告。

5. 令和７年度 教育活動報告

前年度の教育実績に基づき、進路指導主事の山根教諭から進路実績について、教務主任の小笠原教諭から探究活動（H×ACT）及び進学型単位制について報告された。

- **進路実績の分析:** 令和８年３月卒業生の実人数において、国公立大学合格率 74.0%という平成 26 年度以来の高い成果が得られた。卒業生全体の３分の１は地元大学に進学しているといった状況である。
- **H×ACT の深化:** 「ハクゼミ（２月発表)」「ハクトリ（５月１年生)」等、いろいろな外部からの協力を頂きながら、生徒が自発的に問いを立てる探究活動が進められている。
- **進学型単位制の実施:** 本年度入学生から「進学型単位制」が年次進行となっているが、「進学型」であるため普段の授業スタイルが大きく変わる訳ではない。特徴としては、選択科目が増えることと少人数授業ができることである。１年生は必履修科目が多いため、単位制が始まったとは言え変わりはない。ただ、単位制となり教員定数が若干増えたため、先取りとして３年生の数学にて少人数授業を展開している。

6. 令和８年度教育活動等協議

- **役員選出:** 互選の結果、会長に阪本泰光氏（岩手医科大学教授)、副会長に菊池剛史氏（PTA 会長）を選出・承認。

  （阪本会長)「昨年に続いて会長を引き受けさせてもらいます。５年後の 100 周年、そしてそれ以後もご支援させていただきたいと考えている。高大連携をメインにしているが、研究者として研究の面白さを通じて、花北の生徒が世界に羽ばたけるような視野を持ってくれればと思う。」

  （菊池副会長)「会長を補佐するのが自分の役目であるので力を尽くしたい。皆様のお力をお借りしながら、会が良いものになり学校、地域の発展につなげられたらと思う。」
- **学校経営計画（和田校長より説明）の承認:** 今年度に追加した重点目標「キ心理的安全性のある職場づくりの推進による業務量管理と健康確保」について、取組方針にあるア（イ）数理・データサイエンス・AI を活用した探究的活動の推進について、イ（イ）進学型単位制導入についての説明、および達成指標についての説明を行った。

  （阪本会長)「追加点として出されたア（イ）の方針について、具体的に何をやっていくのか」

  （和田校長)「例えば、これまで施錠して管理していた PC 室をできるだけ開放することにし、いつでも生徒が PC 室にある高性能 PC や３D プリンタ等を使える環境を検討。できるだけ多くの生徒が、こうした環境を身近に感じられるようにしたい。本校には、情報教育を専門とし前任校でも DX ハイスクールを担当していた教諭が今年転任してきているので、その経験を活かして指導してもらう予定である。」

  （三國委員)「３魅力化協働パートナーに、地元企業も付け加えて欲しい。優秀な生徒さんたちに、地元企業を PR したい、協力したいと強く思っている。ものづくりネットワークがハブになるかも。」

  （伊藤委員)「単位制が１年生から始まることで１年生と２・３年生との意識のギャップがないか危惧している。配慮してもらいたい。」

  （和田校長)「パートナーとして地元企業を追加、また取組項目のところに進学型単位制のスムーズな導入と追加する。」
- **令和８年度教育活動の承認:** 今年度の教育実績に基づき、進路指導主事の山根先生から進路指導計画について、教務主任の小笠原先生から探究活動（H×ACT）グランドデザインについて報告された。

  進路指導計画・進学型単位制について: 年間通して職員全体または該当学年で進路協議や模試分析会を開催しながら目線合わせをしている。昨今の入試では、日頃の活動や志望動機などを多面的に評価する入試が増えてきている。そうした力を計る外部模試として、非認知能力・思考力等を可視化するものを取り入れながら、面談等でも活用している。成績上位生徒にはいわて進学支援 NW 事業を活用している。桜雲ゼミは外部講師を呼んでの課外授業であり、本校独自で行っている。

  （阪本会長)「進研模試の受験層は幅広く上位校があまり受けていないため、偏差値が高めに出てしまう

とか問題が上位校に適していないと聞いたことがあるが、どうなのか。」
（山根教諭）「どの大学を目指すにも基礎学力は大事である。他の高いレベルを対象とした模試と組み合わせながら進めている。校内実力テストでもレベルに合わせた出題をし、結果を活用している。」
（阪本会長）「進学型単位制の選択科目は複数あるが、それから何科目か選ぶということか。」
（小笠原教諭）「２年生でいうと選択Ａにあたる授業が複数あり、そこから１つを選ぶことになる。何を学べるのか、開講人数は何人か、進学志望に合わせて何を選ぶか等については９月の文理選択時に示せるよう、具体的な内容について今まさに各教科で検討しているところである。」
（阪本会長）「単位制という響きから、もう少し選択できるかと感じていたがそうではないのか。」
（小笠原教諭）「理科や地歴ではそれぞれ選択ができているので、それ以外としては１単位となった。」
（伊藤委員）「少人数授業とはどのくらいの人数を想定しているか。」
（小笠原教諭）「教員の人数と、教室のキャパシティによって決まってくる。今先行している３学年数学は、３クラスに４名の教員が配置されている。進路別・成績別等、様々シミュレーションしている。」
H×ACT グランドデザインについて: １年生は、前期に他学年探究の見学やハクトリを行い、実際には９月から調査研究を開始する（ファーストハクト）。２年生でのセカンドハクトで、テーマを変えたり深めたりしながら調査研究を継続し、秋から３年生の夏までに論文（ハクロン）を提出するまでが一連の流れになっている。
（佐藤委員）「クラウドファンディングの具体例を教えて欲しい。」
（小笠原教諭）「一昨年、商工会議所青年部と協力して花巻地区のスタンプラリーを企画した。その際の費用はクラウドファンディングからと聞いている。そのちょっと前には、花巻で魅力あるような働きをしている人たちをインタビューしパンフレットを作成した生徒がおり、その費用もクラウドファンディングで得たと聞いている。」
（阪本会長）「ハクロンのレベルは各々で決めているのか」
（小笠原教諭）「レベルは３つあるが、黒橋レベルは目指そうと声がけして花高レベル（調べ学習）で終わらないようにしている。」
（阪本会長）「初めからレベル決めてしまうとそこまでいいやという生徒も出てくるかもしれない。生徒を伸ばす取り組ませ方を考えてはどうか。失敗したところでうまく誘導出来たらどうか。」
「スペース BD が連携から外れ、スペースバリューだけになるが、今年度どのような形でサポートに入られるのか」
（和田校長）「スペースバリュー安藤さんとお会いしてお話ししたが、具体はこれからになる。」
花巻北高校教職員アクションプランについて: 勤務時間外在校等時間、年次休暇の取得日数について本校の目標を作成した。教職員がやりがいを感じながら、生徒に対して質の高い教育を持続的に提供できるよう「明るく風通しの良い職場づくり」を推進する。
（菊池副会長）「学校の先生方の負担を軽減するために、地域の方にやってもらえたらいいことはあるか」
（三上副校長）「探究などの場面で外部講師に活用するなどでの軽減できたらと思う。」
（菊池副会長）「市内中学校では、職場体験の受け入れ先を教員ではなく地域のある団体が全て調整しているというところもある。県内であると未来図書館がある。」
（佐藤委員）「部活動支援についてはどうか。」
（三上副校長）「部活動指導による教員の負担は大きい。生徒からの期待や指導される先生方の熱意のあるため難しい問題である。完全な地域移行がなされていない現状では悩ましいところである。」
（阪本会長）「同窓会で部活動指導員等を募ることはできないか」
（佐藤委員）「同窓会だけでなく、各クラブには OB 会があったりする。OB 会を持たないクラブもあるので、何か組織してもらい同窓会でバックアップできたらと思う。」

（阪本会長）「教育活動に支障が出ないよう、先生方の負担を減らしたい。学校が何で困っているのかを知らない方もいると思う。」

（伊藤委員）「実態に合わせたお金と時間とサービスの捉え方をしなくてはならない。時間（数値）だけではなく、内容のフォローをしていく必要がある。」

（三國委員）「時間的な負担として大きいのは、やはり部活動指導なのか。企業にも当てはまるが、大きな負担となっている部分を思い切ってなくしていくことが大切。なあなあにしてはいけない。」

7. 意見交換および質疑応答（要旨）

各委員の専門的な背景に基づき、地域社会の要請を反映した建設的な対話が展開された。

- **冨手委員（地域婦人団体協議会代表）：** 花巻の宝である子供たちが、安心して学びに没頭できる環境こそが地域の活力。環境整備への協力は惜しまない。重点目標キを大切にしてもらいたい。
- **田村委員（岩手県立大学准教授）：** 算数・数学学習困難の原因推定研究の知見から、AI 活用による教職員の負担軽減と教育の質向上を両立させたい。専門的知見を本校の探究活動に還元したい。働き方改革は難しい問題。健康を害するのは大切だが、時間で管理するのは別問題。仕事が好きで遅くまで働いている人もいる。教員にはそんな方が多い気がする。少子化で予算が減る中、お金をかけるのは困難。
- **三國委員（和同産業代表）：** 自社開発の除雪ロボットなどの先端技術を生徒に紹介し、地域産業の魅力を伝えたい。地域を盛り上げる視点を生徒と共有できれば。働き方として、長く働きたい方がいることも否定はしないが、それを含めて長時間労働を良しとしてはいけないのではと考えている。働き方に選択肢はあっていいが、減らせる仕事はまだまだあるので、思い切りよく減らすことに着手するべき。ただの数値目標ではなく、予算建てしてでも取り組む覚悟が必要ではないか。
- **佐藤委員（桜雲同窓会会長）：** 創立 100 周年に向け、学校と連携して教育環境を一層充実させたい。部活動支援も含め、地域の象徴としての本校を強力に後押しする。先生方の業務負担は増えているのでしょうが、バランスを取りながら進めてもらいたい。同窓会としても協力していきたいと思っている。
- **菊池剛史副会長（PTA 会長）：** 先ほど話した市内の事例は東和中学校の事例で、中学校ではＰＴＡ会費の一部を総学の活動費に充てている。また、協働パートナーとして２年生は未来図書館、３年生は地元団体が企画運営をしており、教員は朝夕の出欠確認を行うのみとなっている。先生方が「楽になった」と感じるようになっている。この事例は、８月２４日生涯学習センターで行われるフォーラムで発表予定である。花北高でも同じようにとはいかないだろうが何かあれば相談して欲しい。今後、進学型単位制を進める中で見えてくるメリットや課題については、随時、中学校の先生や中学生にも伝えていって欲しい。
- **伊藤達也（伊藤工作所代表）：** 単位制という新しい流れに期待し、100 周年に向けても応援したい。地域スポーツ移行については今後の動きが気になっている。小中学校での地域移行が進められれば、後に金銭的な負担が地域に及んでくる。高校での移行はできるだけ後回しにしてもらいたい。この３月まで花巻中学校の地域 CN を 3 年間していた。教員の業務負担は年々増えていると感じたため、それを外部からサポートする 20～30 人程度の組織が作れないかと考えている。その対価をどこから支払うか等の問題もあるが、地域が学校を支える時代だと感じている。
- **阪本泰光（岩手医科大学教授）：** 皆様からご意見いただき、学校運営協議会として伊藤様からあったように受け皿を作り、先生方の負担軽減につなげたいとの提言があった。学校としても検討してもらいたい。業務過多になっている部分は、簡素化する、自動化、効率化できるところを県教育委員会と連携して進めていく必要がある。先生方から、困っていることなどを出してもらえれば協議会で意見したい。

8. その他　次回協議会は、令和８年８月 23 日（日）の「桜雲祭」一般公開日に合わせ、生徒の活動を直接見ていただく形式での開催を予定。

9. 閉会